



ニューズレター

2020年秋季号

「戦後75年、戦争体験を聞く会」
開催報告…………… P 1

会長のあいさつ …………… P 1

気功エクササイズ …………… P 3

花かごだより …………… P4

シリーズ「啓子の窓」
…………… P5

ひまわりカレンダー
編集後記 …………… P6

「戦後75年、戦争体験を聞く会」
資料 1～5

ひまわり会は、イーストベイに拠点を持つ日本語を話す人のネットワーキンググループです。日本文化を接点とし、お互いに助け合いながら、より豊かな人間関係を築き、アメリカ生活の充実を目指します。

<http://Himawarikai.org>
mail@himawarikai.org
 Himawarikai
 P.O.Box 6428 Albany, CA 94706

ひまわり会

戦後75年、戦争体験談を聞く会 開催報告

今年には第二次世界大戦の終戦75年の区切りとして、日本でもアメリカでもこの戦争について多く報道されました。この戦争を経験された方は年々高齢化し、直接話を聴く機会も減っていることを踏まえて、東京、沖縄、長崎、広島に住んでいた方々からの話を聞く会をオンラインにて開催しました。お子さまから戦争を経験された方まで、幅広い年齢層の方々が参加され、何年経ても色あせることのない生々しい戦中～戦後の話を熱心に聞きました。（資料は巻末に添付しました）

1. 戦争開始前から終結までの経緯

実際の戦争体験談に入る前に、まず第二次世界大戦開始前から戦争終結までの主な出来事を、年表に沿って振り返りました。
(資料1)

2. 沖縄戦の話

終戦の年(1945年)の3月末から6月、英米の連合軍が沖縄に激しい攻撃を行い、学徒隊など多くの市民が犠牲となりました。戦後、占領下にあった日本がサンフランシスコ条約により1952年4月に独立回復後も、沖縄は'72年5月までアメリカの統治下にありました。翁長なおみさんは、戦前福岡に生まれ戦後沖縄で育ち、沖縄の日本復帰を記念して'75年に開催された国際海洋博覧会の準備とその後沖縄戦資料館の展示改定に携わりました。翁長さんはその経験を7月と8月のひまわり会の「花かご」で書いて発

次ページに続く

会長のあいさつ

ひまわり会の皆さま

陽の沈むのが早くなり、だんだんと秋めいて来ました。ハロウィーン、サンクスギビング、クリスマス、お正月、などいろいろな行事の季節です。何をどのようにセレクトするかはそれぞれ異なると思いますが、新しい形で行われる事になると思います。離れていても、ご家族やお友達と安全な距離でコミュニケーションを取るようになさってください。

今年には歴史的な出来事が多々有り、忘れられない年になりそうです。シェルター・イン・プレースやCovid-19の伝染を防ぐべく制約が新生活スタイルになり、人間が生き抜いて行く為に必要な行動を取る事の重要性を感じさせられた、百年に一度の経験かと思われまます。ブラック・ライブス・マターの抗議、凄惨な落雷と共に発生した多くの山火事。全てがまだまだ終わった訳ではなく、これからも続いて行く事と思います。秋の火事

次ページに続く



ひまわり会主催 オンラインセミナーのお知らせ

アジア系移民の歴史と アメリカン・ドリーム

10/17土曜日 1時～2時30分

UCバークレー山中啓子氏を講師にお招きし、アジア系移民の歴史を各国の当時の様子をふまえて理解するためのセミナーを企画しました。詳細は6Pをご覧ください。

表しました。戦後、間接的に沖縄戦に関わった貴重な体験を綴ったその文章をまとめ、朗読していただくことで私たちは沖縄戦の悲惨さを学びました。そのエッセイ「ぬちど(命)、宝」を添付します。(資料2)

3. 東京大空襲の体験談と戦中～戦後

東京は100回以上空襲を受けましたが、特に1945年3-5月は大規模な爆撃が続きました。当時中学1年(13歳)の瀬川澄子さんが、4月に文京区小石川の家と防空壕が焼けて逃げた時の体験を事前に収録したビデオを視聴しました。この生々しい恐怖は、現代の私たちの心にも深く刻まれました。また澄子さんの戦前～戦後の様々な体験について語っていただいたインタビューの要旨を添付します。(資料3)

4. 長崎の原爆と生き残った被爆者の苦悩

1945年8月9日午前11時長崎に投下された原爆プルトニウムの「ファットマン」は、その3日前に広島に投下されたウランの原爆「リトルボーイ」の1.5倍の威力といわれています。原爆による死者数の記録は推計にすぎませんが、広島の人35万のうち約14万人が、長崎の人口24万人のうち約7万4千人が亡くなったとみられています。長崎市は周りが山で囲まれた特徴ある地形のため、熱線や暴風が山によって遮断され、広島より被害が少なかったと考えられています。

花岡伸明さんは1944年長崎市郊外で生まれ、原爆投下時は生後8か月だったので、原爆投下時の記憶はありませんが、約5年後6歳の時にお母様とお姉様を放射線によるがんで亡くされています。横浜の神学校で牧師の勉強をされ、サンフランシスコで牧師をされていた時、このベイエリアに住む多くの被爆者に会い、サポートする友の会を作り被爆者のオーラルヒストリーをテープに録って書き起こしました。ご自身の経験を通して生き残った被爆者の方々の苦悩について話され、長く残る戦争の傷跡を深く説明してくれました。その要旨を添付します。(資料4)

5. 広島の兵学校で被爆した帰米2世の経験談
戦前日本人の両親がシアトル在住中に生まれ、小学校1年の時帰国した山本タックさんは、原爆投下時広島江田島の海軍兵学校の教室で自習をしていました。突然の閃光や地震のような揺れ、何が起こったかわからない中、大きなきこ雲を目撃したことなど、経験を語ってくださいました。その要旨を添付します。(資料5)

この後参加者の中からも経験談や、親から聞いた話など、活発に意見交換がなされました。戦争は戦時下だけでなく、戦後も人々の生活に深く長く傷を残すことを学び、今まだ世界中で戦争は絶えず、いたるところで緊張が高まっていますが、戦争を避けるために私たち個人個人が何をできるか、深く考えさせてくれた時間でした。ご協力いただいた方、ご参加くださった皆さまに心から感謝いたします。

レポート ウイリアムズ まり



(会長あいさつ続き)

シーズンはこれからなので、油断なさらず、一人一人が避難方法や身の安全を把握なさり、充分注意なさってください。

このような状況下、ひまわり会ではズームでのイベントが多く出来るようになり、参加者も増え、シェア出来る情報・勉強課題も増えるなど、集まりの方法も流れに沿って変わって来ました。これからは是非ズーム・イベントにご参加ください。テクノロジーが苦手な方は電話で参加する事も出来ます。まだ暫くシェルターインプレースは続くと思われまますので、皆さまが人との交流を安全に続けて行ける事を強く願います。

皆さまの安全と幸せを願って、良いホリデーシーズンをお迎えください。

ひまわり会 代表 河野さき子

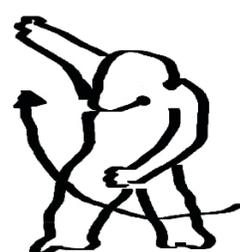
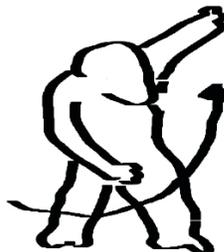


シリーズ「気軽に気功エクササイズ」 サンノゼ気功院 内藤雅啓

衰えた筋肉を戻して健康な体作り

A. 腰の筋肉を鍛えて体力を取り戻す

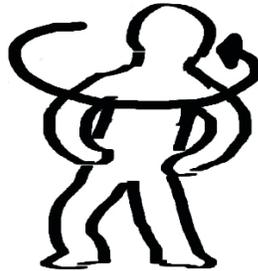
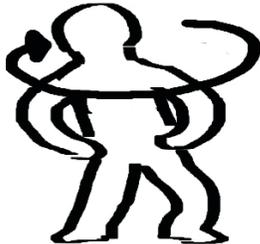
1. 息を吐きながら、体を前に倒し、両膝を軽く曲げ、右手で左膝を抑え、左手を左斜め上に上げる。顔は左手の動きに合わせて上方を仰ぎ、左手を見る。
2. 息を吸いながら、基本姿勢に戻る。
3. 息を吐きながら、体を前に倒し、両膝を軽く曲げ、左手で右膝を抑え、右手を右斜め上に上げる。顔は右手の動きに合わせて上方を仰ぎ、右手を見る。
4. 息を吸いながら、基本姿勢に戻る。これを6回から12回繰り返す。



B. 腰を大きく回して、足腰の筋肉を増やし老化を防ぐ

基本姿勢：両足を肩幅に開いて立つ、両手で腰を支える。

1. 右足を伸ばしたままで、左足の膝を曲げ、腰を大きく前、右、後ろ、左の順にゆっくり回す。
2. 左足を伸ばしたままで、右足の膝を曲げ、腰を大きく前、左、後ろ、右の順にゆっくり回す。これを12回繰り返す。



内藤先生

「気功エクササイズ」のクラスを現在はZOOM (R)を使ってインターネット上で行っています。ご自宅から気軽に参加でき、初回は無料です。この機会にぜひ気功エクササイズをご体験ください。2回目からの参加費：会員\$5.00/ 非会員\$6.00です。詳細お問い合わせは春海三悟(はるみ さんご)Sangoh35@gmail.com;(510)435-4017までどうぞ。

花かご便り

2020年 七月～九月

～俳句・詩

ジャスミンに 思わず外す マスクかな
雷雨明け 赤茶の空に 虹の橋 (土屋 和子)



川開き コロナ吹き飛べ ドドドンと
炎天下 暑さにめげぬ ひまわりや (ツル 玲子)



七十の 手習いズームで フラダンス
ひとひらの 影かなしみの 白き薔薇 (星 きみえ)

もう嫌だあーあー
翼が欲しい
果てしない 澄み切った 青空に向かい 飛び立とう
日々のモヤモヤ 吹き飛ばそう
あーあああーそうそう
めがねと GPS 忘れずに (ベアード エミ)

～エッセイ 「コンポスト」 春海真理子

ステイホームオーダーが出て、家にいる時間が極端に増えた。「こういう時こそ庭仕事を」と決意して意気揚々庭に出てみると、土が乾燥してまるで生気がない。冬の間は雨が降るので、土は黒々と、いかにも豊潤な感じなのだが、乾季が始まると嘘のように枯れあがってしまう。砂漠のようなカリフォルニアの夏は、少々水を撒いても表面をぬらして流れていくだけで、ちょっと掘ってみると、下の方の土は乾ききっている。まさに焼石に水だ。しかも、このあたりの土は粘土質なので、放っておくと、まるでセメントのようにカチカチに固まってしまう。しかし、水不足の中、ふんだんに水を撒くわけにはいかない。この土事情を解決するには常にコンポストを混ぜて、土質をよくしていくしかない。

コンポストは買うこともできるが、生ごみや落ち葉と土を混ぜ、熟成させ堆肥化することで、自宅でも作れる。私も、以前ワークショップに参加し、コンポスターと言われる一抱えもある大きな容器を買い、説明書に従って、コンポスト作りをしたことがある。しかし、コンポスターの中の微生物の働きを活性化させるためには、通気をよくする必要があり、そのためには、ショベルでしょっちゅう中身を上下ひっくり返さなければならない。これが結構、大変な力仕事だった。さぼっていると、そのうち、虫がわいたり、ハエが発生したり、夜中に小動物が餌をあさったりした。こんなに手間がかかるなら、いっそ、郡のコンポスト用のゴミ箱に入れて、毎週回収してもらった方が理にかなっていると思うようになった。そうして、いつのまにか、自家式コンポストはやめてしまった。

せっかく買ったコンポスターは、家の前にFreeと書いて置いたら、あつという間になくなった。きっと今頃、どこかで、誰かが、私と同じような苦勞をしているに違いない。

そういう苦い体験があったので、今回は、コンポスターは使わず、庭に穴を掘り、そこに台所の生ゴミを直接入れ、上から荒土をかけておくことにした。台所のシンクの側に1ガロンくらいのプラスチック容器を置いておき、肉や魚以外の生ごみはすべてここに入れ、容器が一杯になったら、庭にもっていき、土に埋める。夫婦二人暮らしても、生ごみは結構な量になる。この半年近く外食をしていないせいもあるが、週に容器に2杯、約2ガロンの生ごみが出る。過去6か月のステイホームオーダー期間中、ざっと50 ガロン近くの生ごみを出したことになる。大変な量である。それが我が家の小さな裏庭で土に混じり、跡形もなく消え失せている。夏の間、生ごみは結構な速さで分解するようで、数週間後に埋めた後を掘り返してみても、ほとんど原型をとどめていない。そして、驚くことに、あれほどカチカチだった無機質のゴロ土が、いつのまにか湿り気を帯び、ふわふわ、ほくほくになっている。今のところ、変な虫やハエも発生していないし、動物に荒らされた様子もない。このシンプル極まりないコンポストは案外成功したのかもしれない。この秋には生ごみから生まれ変わったこの土に、野菜や花の種をまいたり、苗を植えるのを楽しみにしている。来年の春に、それらがどう育ち、どう花開くか、見届けるのも楽しみだ。

ワクワクしながら、私は今日もせっせと生ごみを庭に埋めている。



花かごは”日本語で遊ぼう”の会です。

子供の頃の思い出や日頃考えている事を文章にするのは頭の体操になります。ひまわり会の会員でない方でも、どなたでも自由に参加できます。

お問い合わせ:

マリコ (510)528-0600 marikowh@gmail.com

カズコ (415)931-3997 kazuko2@comcast.net

シリーズ「啓子の窓」

ZOOM授業の練習と本番

山中啓子

カルフォルニア大学バークレー校では、8月末から新学期が始まった。授業はすべてオンラインで行われている。私も初めてZoomを使って教えている。加えて学生の宿題や成績などの教務も、オンラインで行う。コースはアジア系移民のジェンダーと世代に関するもので、開始からすでに4週間経った。ようやく慣れてきたけれど、コンピューターのスクリーンに写る31人の学生の顔はいまだに覚えられない。でも振り返ると、今年の夏はZoomや他のプログラムを覚え

るのに大変な努力を費やした。大学も多くのワークショップを開催し、新しい技術の習得を支援した。しか

し、インストラクターがZoomで早口にてきぱきと説明する技術の使い方は、直接それを試しながら学ぶin-personのクラスとは違い、なかなか身に付かなかった。

不安を感じてこの挑戦をどう乗り切ろうかと案じていた時に、助け舟を出してくれたのがひまわり会の皆さんたちであった。剣持順子さんが電話してくださった折に、Zoomの習得に苦労していることを打ち明けると、彼女は即座に「私やひまわり会の会員が練習台になりますよ」と申し出てくれた。これはありがたいとばかりに、私も跳びついた。そしてこの提案がひまわり会有志によるZoom講習会シリーズに結びついた。

そして始めた講習会とは、私が長年バークレー校で

教えてきた授業で学生が書いたアジア系アメリカ移民のオーラル・ヒストリーを読みながら、アジア系移民の歴史を学ぶという構想であった。毎週移民の出身国をしばり、その背景にある歴史を習い語り合うというやり方で、7月23日から5回に分けて行った。その目的は、100年以上に渡るアジア系移民への人種差別、労働搾取、移民排除の歴史を再認識し、1965年の移民法改革以降に大量に移民してきた多様なアジア人コミュニティを理解しようとするものであった。始まると、毎回8人以上の参加者が集い賑やかな講習会となった。誰もが、ベイエリアに住むアジア系移民と広く接触しているから、学生が書いた論文にいろいろ反応する。皆んなであれこれ話し合っているうちに、予定の90分があつという間に過ぎた。お陰でZoom授業の練習会が、思いがけなく意義ある学習と楽しい交流の場になった。

そして始まったZoom授業の本番は、自信を持って難なくやれた。もう既に練習を重ねているから、Zoomの操作も手慣れてできた。まさに練習の効果大なりで、ひまわり会の講習会に「感謝・感謝」というところであった。



そしてそれから4週間経つた今、新たな挑戦に面している。それは、スクリーンの向こう側にいる学生たちとどのような信頼関係を築き、彼らを授業の目的に導くかという教育本来の課題である。幸い、学生が提出するレポートを読む限りにおいて、彼らの新鮮な意欲と強い興味が感じられて、私の講義もそれなりに伝わっているように思われる。これもオンライン教育の脅威に押され必死に準備をしてきた成果なのかと、一息つきながら、私はまた明日の授業の用意に取り組んでいる。



ひまわり会カレンダー

10月 ===

古本市はお休みです。

毎週木曜日 「気功エクササイズ」 10:00~11:30 am
ZOOM

14日(水) 花かご 1:00 - 3:00 pm, ZOOM

17日(土) アジア系移民の歴史とアメリカン・ドリーム
1:00 - 2:30 pm, Zoom

11月 ===

古本市 未定*

11日(水) 花かご 1:00 - 3:00 pm, ZOOM

毎週木曜日 「気功エクササイズ」 10:00~11:30 am
ZOOM

12月 ===

古本市 未定

9日(水) 花かご 1:00 - 3:00 pm

「ZOOM 気功エクササイズ」 未定*

*未定のイベントについては開催内容・時間などが変更・中止となる事があります。ひまわり会ホームページ、またはそれぞれのお問い合わせ先にご確認ください。

<https://himawarikai.org>

ひまわり会主催 オンラインセミナーのお知らせ

アジア系移民の歴史と アメリカン・ドリーム



日時: 10/17(土曜日)

1時~2時30分

講師: 山中啓子氏 (UCバークレー校講師)

方法: オンラインズームミーティング

費用: 無料

アジアからアメリカへの移民は、約170年に渡る歴史を持っています。多岐にわたる民族背景を持つアジアからの移民、それぞれの祖国の事情や個人的な夢、どのような背景で何を求めて渡米し、どのような生活を送ってきたのでしょうか。様々なバックグラウンドを持ったアジア系移民は、特に近年増加しており、周囲にも多く存在し、私たちもその一員です。UCバークレーのエスニックスタディで、アジア系移民について研究および講義されている山中啓子氏をお招きして、アジア系移民の歴史と動向について話していただきます。

参加ご希望の方は、10月14日(水)までに下記のリンクから申し込みをお願いします。

<https://www.eventbrite.com/e/123410374753>

参加希望の方には、開催の数日前にズームのリンクをお送りします。皆さまのご参加をお待ちしています。

編集後記

ひまわり会は2021年に創立50周年を迎える。現在その記念行事の計画中であるがこのコロナ騒動の中、どんなことが出来るのか、今は暗中模索の状態だ。ひまわり会はボランティアによる相互扶助が中心の活動であり、会員の精神的、そして実生活面でのサポートを目的としている。だから華々しく映る歴史というよりも、ひまわり会に様々な形で関わった方々の「それぞれの想い」を集大成することでこの50年の歴史を振り返り、記録としてとどめることに意義があると思っている。現在のシェルターインプレイスの状況下で残念ながら恒例の古本市は開催できないものの、新型コロナウイルス、アメリカの医療、アジア系移民、ブラックライブズマター、第二次世界大戦に関する体験談を聞く会、

などなど、オンラインでの勉強会、セミナーは従来よりも頻繁におこなわれている。参加して下さる方の数も増え、意見の交換も活発だ。日本語で遊ぶ「花かご」や「気功エクササイズ」もオンラインになったことで「遠くからでも参加できる」「移動時間が節約になる」など、むしろプラスの効用があるようだ。第二次大戦中、日系人は強制収容されたが、そこで伝統芸能など日本文化の継承が積極的に行われていた様子が、ベイエリアに住むアーティスト Shirley Muramoto氏制作のドキュメンタリーフィルム「Hidden Legacy」に描かれている。「我慢」「仕方がない」などと言いつつ、日本の精神文化には今おこっている事態にポジティブに立ち向かう発想の柔軟さがあるように伺える。コロナ騒動収束後にくるであろう、新しいスタンダードにはこの精神で望んでいきたいと思う。

オオシタ・ケイジ



「戦後75年、戦争体験談を聞く会」 資料1

第2次世界大戦および戦前、戦後の主な出来事

1931年(昭和6年) 9月満州事変始まる。

'32年 3月関東軍が「満州国」を建国。5・15事件(海軍将校らが犬養毅種相らを殺害)

'33年 3月満州国を認めない国際連盟に脱退を通告。

'36年 2・26事件(青年将校らがクーデター。斎藤実、高橋是清らを殺害し永田町占拠)

'37年 7月日中戦争が勃発、12月日本軍が南京占領。

'38年 4月国家総動員法公布。

'39年 5月ノモハン事件で日ソが交戦。

9月ドイツのポーランド侵攻に対し英仏が宣戦し第2次世界大戦勃発。

'40年 9月日独伊三国同盟調印

'41年 4月日ソ中立条約調印

7月日本軍仏領インドシナ南部に進駐、米国は対日石油輸出を全面禁止。

11月米国がハルノート(中国からの撤退などを求める交渉案)を日本に提示。

12月8日 日本軍ハワイ真珠湾攻撃により米英など連合軍との太平洋戦争開始

'42年 2月米国内でルーズベルトが大統領令を発令、計12万人以上の日系人が強制収容。

3月東京に初の空襲警報。 6月ミッドウェー海戦で日本は4空母を失い戦局が転換。

'43年 9月イタリアが無条件降伏。 11月大東亜会議開催。

'44年 7月サイパンで守備隊3万人が全滅。 10月神風特攻隊が初めて米艦に突撃。

'45年 3月東京大空襲

4月米軍が沖縄本島に上陸し3か月に渡り抗戦

5月ドイツが無条件降伏。

7月米英中が日本に無条件降伏を求めるポツダム宣言。

8月6日米国が広島に原爆投下。

8月8日ソ連が対日参戦。

8月9日米国が長崎に原爆投下。

8月14日ポツダム宣言受諾を決定。

8月15日昭和天皇が終戦(敗戦)をラジオで国民に発表(玉音放送)。

8月30日マッカーサー連合軍最高司令官が占領統治のため厚木に到着。

9月2日米艦ミズーリ号で降伏文書に調印。

「戦後75年、戦争体験談を聞く会」 資料2

「ぬちど(命は)、宝」 翁長なおみ

1975年に「沖縄国際海洋博覧会」が開催され、幸運にも私はその準備に携わる貴重な経験をしました。

終戦後27年に渡りアメリカの占領地だった沖縄が、1972年に日本に復帰した記念に、世界中に呼びかけて海の祭典が開催され、主催地の沖縄も沖縄館を出展することになりました。沖縄は四方海に囲まれており、古くから『ニライカナイ信仰』、つまり「水平線のかなたに幸せをもたらしてくれる五穀豊穡の世界がある」と信じられてきました。このような背景から、沖縄館のテーマは、『海や、かりゆし』と自然に決まりました。「かりゆし(嘉利吉)」は沖縄の方言で、「幸せ」「豊饒な」などの意味があります。

沖縄館の出展に際し、官民挙げての行事として民間に委託することが決まり、「沖縄館設立総合プロデューサー事務所」が開設されました。中心となる専門委員は、県内外の建設、展示、歴史、民俗学、戦争史の専門家や大学教授等、24-5名で構成されました。その委員の意見をまとめて、形にしていくのがプロデューサー事務所の仕事です。事務所は、総合プロデューサー、事務局長、学芸員、議事録作成の事務員(私)の4名のチーム構成で、総合プロデューサーの中山良彦氏以外は女性でした。

私たちの最初の仕事は、大きな長い机に山積にされた沖縄に関する本を、おそらく2週間ぐらいだったと思いますが、短時間に読むことでした。次に本を片づけ、私たちの頭に積み込まれて印象に残ったものを取り出していく作業です。それを、川喜多二郎氏が考案されたKJ法を用いて、大小の紙に重要なものと枝葉のものとを分けて書き出していきました。このような作業の結果、以下のようなテーマが書き出されました。

1. 信仰:うんじゃみという海の祭り(女性の祭司のみ)、シヌグという山の祭り(男性の祭司のみ)、イザイホーという久高島(神の島)で12年に1度午年の島の女性が神格を得る祭り
2. 薩摩の支配
3. 大貿易時代:琉球王国は、中国、日本、東南アジア諸国と交易を持ち、中継貿易地として栄えた。
4. 太平洋戦争:地上戦で20万人の人が亡くなり、多くの文化財も消失した。
5. 琉球政府:終戦後も沖縄はアメリカの占領下にあった。

これが沖縄館を作っていく上のたたき台となり、専門委員のメンバーと泊まり込みで肉付けしていく作業に入りました。

た。沖縄館構想が八分どおりでき上がると、琉球王国が日本の幕府に送った貢物を借りることになり、当時の徳川黎明会会長であり尾張徳川家当主の徳川氏が会議に参加され、また映像・環境音楽の担当として、芥川也寸志氏も参加されました。

プロデューサー事務所のスタッフ4人は、ちょうど嵐の中に放り込まれたように、朝から時には夜中の1時~2時まで、会議と資料収集と打ち合わせの毎日でした。議事録を担当した私は、専門的な会議についていけず、質問しようとしても白熱化した場ではそれもできず、呆然としてペンとノートを持っているだけのこともありました。また、ある時は話があまりにも面白くてのめりこんで聞いてしまい、後でプロデューサーに大目玉を頂戴したこともありました。他の2人の女性スタッフも同様に、トイレで泣いたり、落ち込んだり、愚痴を言いながらも、励ましあって何とか乗り切ることができました。でき上がった沖縄館は、7月から翌年1月までの6か月間の会期中に、多くの来館者を迎え大盛況で、苦労が報われた思いがしました。

また、沖縄館の広報担当だった私は、同じ叱責を数社の新聞記者から受けました。それは、南部に開館された『沖縄戦資料館(当時の名称)』の内容に関し、「旧日本軍を中心とした展示内容だが、沖縄戦はまさしく沖縄の地上戦で、米軍は日本本土への侵略の前線基地として、住民を巻き込んだ日本軍との戦いの場になった。沖縄は多くの住民が犠牲になり、その傷は今も癒されていないという現実を、館は訴えるべきだ」というものでした。「私に言われても困ります」と、県の力のある人を紹介して取材をしてもらいました。その後、どのような話し合いになったかは知らないまま、長かった博覧会は終わり、私の仕事も終了しました。

その疲れがとれたころ、博覧会の沖縄館総合プロデューサーだった中山氏から、「沖縄戦資料館の展示替えをするので手伝ってほしい」との話があり、2~3週間で終わるとのことだったので引き受けました。新しい展示の構想は、展示物をできる限り少なくして、住民の生の証言をメインに出すとのことでした。中山氏と私は、県から借りてきた分厚い数冊の証言集をひたすらに読み込んで、中から展示にふさわしい証言を選び出していく作業を始めました。それは、まるで戦場の中に放り込まれ、泣き叫び、傷ついた人たちの前に立っているような感覚で、当時は悪夢にうなされ、暗闇が怖くて夜は外に出られないこともありました。また、戦争史研究者と中山氏と3人で激戦地となった南部に行き、住民と日本軍が立てこもった洞穴を何カ所かを見ましたが、その当時でも何体かの人骨が残っていて、「これで戦争は完全に終わったといえるのだろうか」とやり切れない怒りを覚えました。これらの一連の作業が終わると、この後は専門委員の人たちでまとめられることになり、私の仕事はこれで終わりました。

1978年10月に展示内容が一新された後、沖縄戦資料館を友人と訪ねました。洞窟のような暗い展示室には、アクリル板の下に切り取られた短い証言の1つ1つにスポットライトが当たり、目と胸に飛び込んでくるような感じになっていました。展示物は、かけた茶碗、さびた鍋、ボロボロの衣服、軍服など点々と置かれていましたが、証言に圧倒されてあまり目につきませんでした。入口の辺りは外の光で少し明るいけれど、奥に行くにしたがって暗く、証言も救いようのない絶望と悲鳴に満ちた地獄絵を見るような、凄惨を極めた言葉になっていきました。友人が外に出たいというので急いで歩き出すと、出口の近くに一段と大きく書かれ、強いスポットライトに輝いている証言があり、この前で立ち止まりました。「ぬちど、宝」とあり、これは、家族を失い自分も傷ついたオーバー(老婆)が誰かを励ましていた言葉で、唯一救われた証言でした。「どんなことがあっても生き抜きなさい。命さえあれば未来はひらけていく」ということでしょうか。

今回この経験を書くことになり、インターネットで「沖縄県戦争資料館」を検索すると、「沖縄県立平和記念資料館」と名称が変わり、外観も展示室もすっかり変わって見違えるようになっていました。あれから一度も行っていないのでわかりませんが、「戦争とはどういうものか、平和を築き守っていくには私たちはどうしたらいいのか」と、考えを深くする場所であってほしいと願うばかりです。

戦後、1950年に沖縄タイムス社の記者が「鉄の暴風」という、沖縄戦を住民の視点で記録した本を出版しました。このタイトルは、約3か月にわたり沖縄が米軍の激しい空襲や艦砲射撃を受けたさま、無差別に多量の砲弾が撃ち込まれるさまを、暴風に例えて付けられたものです。当時すべての出版物は、占領軍司令部に英訳して許可を得なければなりませんでした。この本を英訳したのは琉球大学英語教授の翁長俊郎氏で、その訳文のすばらしさは軍司令部でも高く評価されたと聞きます。タイトルを『Steel See』とし、「ある朝、沖を見ると、水平線にある幸せと五穀豊穡の世界である、ニライカナイは敵の艦船でびっしり埋め尽くされていた。」と、訳は始まっていました。アメリカ・イギリスの連合軍は、約1,500の艦船と延べ54万8,000人の兵力で、1945年3月26日の慶良間諸島を皮切りに、沖縄への一斉攻撃を始めました。これに対する日本軍は、現地招集の防衛隊と学徒隊2万人を加えて約10万人でした。連合軍は、4月1日に本島中南海岸に上陸してから、6月23日に日本軍司令官自決後組織的な戦いが終わるまでのわずか3か月で、沖縄を掌握しました。沖縄戦の特徴は、住民の集団自決、日本軍による虐殺(住民がスパイになるという恐れ)が行われたことで、戦闘員よりも一般住民の戦死者が多いといわれ、実に県民の4人に1人が命を落としたと記録されています。

学徒隊には、女子のひめゆり学徒隊と男子の鉄血勤皇隊がありました。ひめゆり学徒隊は、1944年に日本軍が中心(次ページに続く)

になって女子学生に看護訓練をするために結成され、師範学校と沖縄県立女子校の、教師18名と13歳から19歳の女子生徒222名で構成されていました。他に8つの学徒隊も存在しましたが、その半数以上が亡くなりました。

17歳でひめゆり隊に動員され奇跡的に生き延びた島袋淑子さんは、戦後33年教員をした後、1989年のひめゆり資料館会館のための資料収集に携わり、開館後も語り部として、その後副館長を経て館長となり、2018年90歳で館長を退任されました。退任後の今も戦争体験の語り部を続けられています。

島袋さんの班は、壕の中の病院で生徒16名で600人の重症病兵の食事介助、汚物処理、手足切断の手伝いから遺体埋葬まで行うという過酷な毎日でした。そして6月18日、日本軍から解散命令が出て、「今からは自らの判断で行動せよ」と突然に言われ、洞窟から出され敵前に放り出されました。逃げまどっているうちに大けがをして動けなくなった時、捕虜になり死を覚悟した島袋さんを、優しく治療して助けてくれたのは、鬼畜米兵と教えられていた米兵たちでした。「捕虜になると女子は強姦されて殺され、男子もむごい殺され方をする」と教えられていたので、多くの人たちが集団自決をしました。自決用の手りゅう弾を渡されていた人も多く、また高い崖から飛び降りた人も多くいました。これは沖縄戦で多くの犠牲者が出た原因の1つです。

戦後、ひめゆりの塔慰霊碑の門前で参拝者のために、花や線香、飲み物を売る小さな店が数軒ありましたが、ある店主の話に次のものがあります。『時々泊まることもあったが、ある夜戸をたたき音がして出てみると、モンペをはいて鉢巻をした女学生風の女性が立っていて、「おばさん、友達が怪我をして死にそうなのですが、水を欲しがっているの下さいませんか?」と言い、その娘も傷だらけで杖にすがって立っていた。急いで水を持ってくるとその姿はなかった。』これに似た話を以前よく聞いた気がします。その女学生や他の迷える魂たちは、今は浄化され安らかに眠っているのでしょうか、それとも今の私たちの心には届かなくなったのでしょうか。

島袋さんは、「国は戦争になったら国民を守ることはしない。二度と戦争をしない、できない国を皆で守っていかなければならない。武器で平和を作ることはできない」と語り部として来館者や講演会で伝えています。そして、「優しさと生きる強さを持って欲しい。命はたからです。」と、沖縄戦の生きた証言者として、健康が続く限り語り続けています。

今、私たちはコロナ禍の中で、病と死と先の見えない経済の行く末に、不安や恐怖を感じています。その反面、外出自粛で今までにない多くの自由時間を持ち、「自分と向き合う時間ができ、そこから新しい自分を見つけることができた」と、ポジティブにとらえる人もいます。今生きているこの命をどう使っていくか、この沖縄戦の話が少しでもお役に立てばうれしいです。(資料2 完)

「戦後75年、戦争体験談を聞く会」 資料3

瀬川澄子さん

東京大空襲の体験談とインタビュー要旨

空襲はいつも真夜中だったので当時は洋服を着て寝ていた。その夜も真夜中過ぎに空襲警報が鳴り、家族と一緒に防空壕の中に避難していたところ、そこら中に落ちてきた焼夷弾の1つが防空壕の真ん中にななめ横から入ってきて、真っ暗だった中がパッと明るくなり燃え出した。皆ひとつしかない小さな戸口から逃げ出したが、一番奥にいた私はどうその火をどう超えたのかも覚えていない位無我夢中で戸口まで行ったら転んでしまい、危機一髪のところを兄が引き出してくれた。家はすでに燃え盛っており、父と兄1人を除いた4人は墓地に逃げるよう父に指示された。上からも足元も火に囲まれ、多くの人が逃げ惑う中、墓地に向かおうとしたが、途中で誘導係に川の方に行くよう指示され、皆で川に向かった。もうすでに多くの人が集まっており、火が迫ってきたら川に入ろうと皆で話し合いつつ、一帯の火事でオレンジ色になっていた空や周囲を不安の中呆然と立って見ている。やがて火事も燃え尽きて収まり夜が明けてきたので、皆で歩いて家に戻った。焼けた家の前で父と兄が、墓地に皆が来なかったのととても心配して待っていた。この時家族が皆無事だったことは幸いだったが、今でもこの恐ろしい経験は鮮明な記憶として残っている。

インタビュー要旨

1932年に生まれた。戦時中はそれが当たり前であまり怖いと思わず育っていた。小学校3年の時に太平洋戦争が始まった。

最初のころは、出征軍人が持参する「千人針」をつくる人が多くいた。「千里行って千里帰る」という言い伝えに基づき、木綿の布にトラの輪郭を点で描いたものを千人の異なる人が縫い留めの小さな球を糸で作った。家族、親類、近所やのほか駅等の人通りの多いところで通行人に頼んだり、寅年の人は年齢数できるなど、皆真剣に信じていた。

戦時中は英語やアメリカに関するものは禁止されたが、野球はアウトやセーフなどの言葉を無理やり日本語に直して行われていた。軍国主義一色で、戦争反対や文句を言う憲兵に連行・投獄され、罰せられ、言論の弾圧があった。「欲しがりません勝つまでは」「贅沢は敵」「鬼畜アメリカ」など多くの標語が流行り、人々は洗脳されていた。

東京の空襲が始まると子供たちは個人や集団で学童疎開した。私は疎開先で小学校を卒業し、中学に行くため東京に戻り、バッテリー工場になっていた中学で働くことになったが、空襲で焼け始業式もなくなった。姉は造幣工場で働いていた。(次ページに続く)

戦時中は「何々であります」などの軍隊の言葉遣いを教えられ使うように指示され、軍人勅語、宣戦詔勅、教育勅語を読まされた。市民は本土決戦になった時には竹やりや銃剣で戦うように指導され、皆真剣に練習していた。戦時下大人たちは、日本軍が勝っているというニュースを信じるような環境下に置かれていた。米軍が飛行機で撒いたビラ(マリアナ情報という)を「拾うな、読むな」と言われていたが、皆チラ見をしていた。

家の焼失後は、焼け残った知人宅に短期間お世話になり、丹沢山近くに疎開先として予定していた住居の完成を待ち移転した。玉音放送はそこで聞いた。私は「戦争が終わってよかった」と思ったが、人々は「負けたのか」と呆然としていた。

進駐軍が来たら「女性は襲われる」と真剣に怯え、男装やわざと汚い格好をすることを考えていた。実際にはハワイアンやジャズ音楽がたくさん流れてきてほっとし、ジープがいっぱい走っていたが、あまりネガティブな印象は持たなかった。家が焼失したので、しばらくは焼け残った大森の叔父の家からキリスト教系の私立中学に通った。新しい教科書がまだのがないので、戦中のものをGHQの検閲を受けて、教室で各自禁止部分を黒く塗りつぶしてから使った。

軍国モードが一掃され、開放感が全国に広がり、ガラッと雰囲気が変わった。間もなくNHKラジオで夕方に毎日15分英会話の放送が始まった。「狸囃子」の曲に”Come come everybody”で始まる英語の歌詞に変えたテーマソングは誰でも知っているほどだった。

衣食住全ての物資が不足し、GHQ物資GI用食料品が横流しされ、闇市や露店が焼け野原のあちこちに立ち、インフレがひどかった。お金がないと生活が難しかったが、その中でカルメ焼き、ポン煎餅、重曹パンなどのお菓子は家で作れてとてもおいしかった。

兄4人の内上2人はフィリピンと中国の戦地に行った。終戦後フィリピンの収容所にいた兄から「問題なく暮らしている」という手紙が来た後、復員した。「敗戦近くになりますます武器もなく、ただ逃げ回るだけだった」と兄から聞いた。収容所での歌舞伎様の化粧と衣装を着た芝居の写真を見せてくれた。しかしフィリピンでマラリアにかかり帰国後透析が必要となり、それが原因で亡くなった。中国に行った兄は、帰国の船の中で栄養失調で亡くなった。その他の家族や親せきは無事だったが、近所から広島に疎開した姉妹が被爆し、ひどい火傷の治療のためアメリカに送られたが、戻って来なかった。(資料3 完)

「戦後75年、戦争体験談を聞く会」 資料4.

花岡伸明さん 原爆被爆者の苦悩(要旨)

戦争の傷跡を一番感じたのは、牧師になるために横浜の関東学院大学に通っていた時のこと。学長の富田富士夫先生は両足に力が入らず松葉杖を使って体を揺らしながら必死に歩いておられた。その原因は、戦時中平和主義者で徴兵を拒否したため投獄され、殴る蹴るの拷問で両足を骨折したにもかかわらず治療を受けられなかったため歩けなくなったと知ったとき、戦後横浜の復興に貢献された立派な方、神学・社会学者として活躍し学長になった方が、そういう扱いを受ける戦争というものを、心から怖いと思った。

原子爆弾と通常の爆弾の違いは、爆発時のエネルギーがけた外れに大きいことと、放射線を出すこと。空気が膨張して爆風で家の下敷きや飛来物に当たって死傷したり、また上空で爆発した火の玉が太陽の表面の2倍くらいの高温なので、それに触れたり近かった人は蒸発したり全身大火傷したり、火が地上に降りて火災になり死傷する。これらの爆風や火の熱で死傷した人が多くいたが、一番タチが悪いのは放射線による被害である。近くで放射線を浴びた人は亡くなったが、残留放射線もあり、直接被爆していなくても爆心地に近い所に救助や家族を探しに行った人も放射線による被害を受けた。また爆発後放射線を含むちりやほこりとして舞い上がったものが黒い雨となって地上に落ち、空気や水も汚染され長期的な健康被害が起こる。

原爆投下時父は海軍中尉で台湾等に出向き不在で、長崎と佐世保の中間ぐらいのところに母と姉と住んでいたの、爆心地からは距離があつたが、風下にあつたので、母も姉もかなりの放射線を浴びていたと思う。戦後父が復員後「こんなところに長く住んではいけない」と、熊本の友人を頼って移動し幼稚園を過ごし、その後小学校は福岡で行った。私の記憶にある母と姉はいつも青白い顔をして床に就いていた。放射能は脊椎に蓄積し造血機能や免疫能を傷害し、甲状腺がん等多種のがんや白血病、感染症にかかりやすくなる。私が6歳の時に、数か月の間隔で2人ともがんで亡くなった。母と姉は、政府の決めた範囲以内に住んでいなかったし、また戦後福岡に移り住みそこで亡くなったので、原爆被害者として数えられていないが、こういう人はほかにもたくさんいたと思う。

その後、父が医師に私の健康について聞き「息子さんは10歳まで生きられないでしょう」と言っているのを聞いてしまった。それは6歳の子どもにとっては精神的にとっても大きなショックで、もともと無口だったが、それからしばらくまったく言葉が出ずしゃべれなくなった。10歳を超えても生き延びてほっとしたが、その次につらかったのが、今でい

(次ページに続く)

う「サバイバーズ・ギルト」、生き残った者の罪悪感であった。「なぜ母と姉のようによい人が死に、自分のようにどうしようもない人間が生きているのか。生きていてごめんなさい」と子供の時から、生きていくこと自体を罪と感じていた。

横浜の神学校卒業後アメリカに留学して学び、その後アラメダの教会で牧師となった。その時にアラメダに住み全国被爆者協会の会長をしていた倉本寛司さんに出会い、彼を通して多くの被爆者の方に出会った。当時西海岸に約700人の被爆者が住み、特に広島に被爆者が多かった。それは、広島女学院に二世部というのがあり帰米二世が多く、広島と日系社会の関係が深かったからである。

寛司さんと会った後、被爆者友の会という、ソーシャルワーカーやボランティアと一緒に被爆者をサポートする会を作った。1979年頃だったと思うが、この時に被爆者をインタビューして録音し、書き起こしてオーラルヒストリーの記録を作り、大学の図書館に入れて研究者の資料にしてもらった。その時被害者は、「ピカドンで亡くなった人はラッキーだった」と一様に言っていた。なぜなら被爆者は皆、いわゆる原爆病、放射能汚染によって次から次に起こる病気だらけの生活に疲れ果てていたからである。また、家族にも体調不良の愚痴は「またか」と相手にされず、もう言えなくなっていたので、被爆者同士が同じことでも話し合えることが心の助けとなった。私が一番若いくらいで、これらの多くの方は亡くなった。

広島と長崎の原爆で約22万人、東京3月10日の大空襲の1晩で約10万人、大阪の7回の空襲で約10万人、その他名古屋、神戸、横浜などでも多くの人が亡くなった。横浜も焼け野原となっていた。日本全体で、軍人と一般市民併せて約300万人が亡くなったといわれている。こんな大きな犠牲を出す戦争の怖さ、どれだけ多くの人が戦中も戦後もどれだけ悲惨な生活をしてきたのか、戦後75年を経て記憶はどんどん薄まってきているが、こういう体験を多くの人に伝えていくことは意義がある。この機会を感謝します。(資料4 完)

「戦後75年、戦争体験談を聞く会」資料5.

山本タックさんの広島での原爆体験談の要旨

まず私の経歴を簡単に話します。私の両親は、1922年にシアトルに材木商である山本商店の支店を設けるために移住しました。そして13年間の在住中の1929年に、私はシアトルで生まれました。私は今年91歳になりました。日本と米国の2重国籍を持っていました。私は幼稚園と小学校1年の3か月までシアトルで過ごし、その後両親に連れられて神戸に移住しました。日本では、小学校、旧制中学校、旧制高

等専門学校を終えました。1945年の4月から8月まで広島県江田島の海軍兵学校で学びました。

戦後アメリカに帰ってから、アメリカ陸軍に3年志願し、韓国の桂城で軍事情報部に勤務、除隊後はシカゴのイリノイ工科大学に学び、卒業後サンフランシスコに在住し、36年間引退するまで建築家として頑張りました。

今日の話は1945年の8月、広島県江田島の海軍兵学校で学んでいた時の経験になります。

1945年3月17日、米空軍の爆撃で神戸の須磨の我が家は全焼しました。そして2週間後の4月1日に海軍兵学校に入校し、忙しい日課、厳しい規律、激しい訓練の日々を過ごしていました。そして話は8月6日の朝に移ります。この朝アメリカの2機が広島方面に向かって警報が出ていました。警報はおそらく偵察機との推察でそれ以降の警報は出なかったと思います。

その朝、私の所属する分隊は1階の教室で自習時間中で、45人が机に座って静かに学んでいました。音と言えば静かに本をめくる音ぐらいでした。すると突然雷の閃光のようなものを感じました。皆が何だろうと前後を見渡しました。数秒後激しい揺れ、「何だろう、地震かな」とまた皆が周囲を見渡しました。上級生が何かつぶやいているほかは、また静かな教室に戻りました。8時になって自習時間も終わり、私は皆について外に出ました。北の方にもものすごく大きい今まで見たこともないような雲があるのを見ました。ご存知のように原子爆弾のきのこ雲ですが、その時は誰もわからず、上級生が「たぶん呉の弾薬庫が爆発したのではないかと」ささやいているのを聞きました。これが世界で初めて落とされた原子爆弾であったことを、私は数日後に知りました。そして3日後に長崎にも原爆が落とされたことを後で知りました。

後になって調べたところ、私がいた教室は爆心地からわずか12マイルしか離れていませんでした。私たちの教室の北側に丘があり、原爆の強烈な閃光と強風が妨げられたようでした。今日まで生きていることを考えると、私は幸運にも何の悪影響も受けなかったということでしょうか。

そして2週間後に終戦となり、兵学校は閉鎖。家に向かって帰る夜、呉からJR広島駅まで歩きました。広島は真っ暗、本当に真っ暗。朝になって初めて悲惨な広島を見ました。人から、「広島は被害は、ほかの町の空襲からの被害と比べるとどう違うのか」と尋ねられたことがしばしばありました。私には、完全破壊された広島も神戸も、完全破壊には変わりないと思います。恐らく、死亡した人の数は広島の方が多かったでしょうが。

ともかく、いつになったら戦争のない平和な世の中になるのでしょうか。(資料5 完)